

講演「韓国における二つの欲望の行方」（要旨、日韓文化交流基金 NEWS79 号に掲載）

2016 年 6 月 27 日

鄭大均氏（首都大学東京名誉教授）

二つの欲望

今は亡き人類学者のクリフォード・ギアーツがいていたことだが、第二次世界大戦後に独立した「新興国」(new state) に生きる人々には、二つの欲望（動機）に同時に駆り立てられる状況があって、両者の間に良い緊張関係が維持されるとき国家は発展の推進力を得るが、二つの欲望はしばしば対立するものであり、それは国家の発展を妨げる最大の障害になるものでもある。

二つの欲望とはなにか。一方が国際社会で重んじられる存在、名のある存在になりたいという欲望であるとしたら、他方は活力ある現代国家を建設したいとか効果的な政治体制を作りたいという欲望であり、ここでは前者を「自尊の欲望」、後者を「実利の欲望」と呼んでおくことにする。

「統合的革新」と題するこの論考で、ギアーツが念頭においていたのは多民族、多言語、多宗教のアジア・アフリカ諸国であり、二つの欲望は、二つの理由で深刻で慢性的な緊張関係を生みだすようになるという。一つは人びとの自己意識が血縁や人種、地域、言語、地域、宗教といった原初的感情 (primordial sentiment) と深く結びついているからであり、もう一つは集団の目的を実現するために、独立国家の重要性が増しているからである。ギアーツの論考の初出は 1963 年である。アジアやアフリカに多くの独立国家が誕生し、きびしい現実に向き合わざるを得なくなかった時期に書かれたものである。

この論考に筆者が接したのは 80 年代末、韓国で暮らしているときのことで、「原初的感情」という言葉が心に響いた。それを手がかりになにかおもしろい韓国論が書けそうな気がしたが、果たせないまま、時が過ぎ、やがて論考のことも忘れていた。今、改めて論考を読んで思うのは、多くの新興国とはあまりに異質の韓国の民族的、言語的均質性ととともに、二つの欲望間により緊張関係を維持し、それをこの国の発展の推進力とした政治指導者たちの賢明さである。活力ある現代国家は自然のままにできあがるものではない。

原初的感情との結びつき

その韓国に変化がやってきたのは新興国によく見られる「人心の離反」とはあべこべの「人心の一致」を契機とするもので、これは民族的均質性や言語的均質性を特徴とする国に「原初的感情」が提唱されたときになにが起きるのかを教えてくれる事例である。

では、原初的感情の提唱が多くの新興国では「人心の離反」を生みだすのに、なぜ韓国では、「人心の一致」が生みだされるのか。韓国では、国民国家のアイデンティティとして原初的感情が提唱されても、それがもう一つの集団の原初的感情と競合するとか、対立するという状況が考えにくいからである。いいかえると、多くの新興国において、原初的感情の提唱が国民としての感覚との間に葛藤を生みだし、荒廃をもたらすという失敗の経験

が、やがては自国のアイデンティティとして、人種や部族や言語や宗教などを公然と掲げ、それを躊躇させるようになるのに対し、そのような失敗が考えにくい韓国においてはむしろ原初的感情の提唱が選好されるようになるのである。原初的感情の提唱こそは「人心の一致」を生み出す方法であり、だから政治家もメディアもそれを利用しようとする。

日本の状況は、これとは似て非なるものであろう。日本もその政治的単位が言語や文化の単位にほぼ重なる国であり、また日本人に民族的ナルシシズムがないわけではない。しかし自国のアイデンティティを語るときに原初的感情をもちだすことは戦後の日本においては批判されることが多かったものであり、とりわけその批判者として在日韓国・朝鮮人が果たした役割は大きい。これに比べると、韓国では、「民族」のナルシシズムが語られても、それによって、自己の尊厳が傷つけられたと感じ、それに異議申し立てを試みる集団が存在しないのである。

国家アイデンティティの再定義

では、韓国における二つの欲望や原初的感情の状況にはどのような変化があったのか。ここでは、「反共ナショナリズム」から「民族ナショナリズム」の国へという、国家アイデンティティ（政治的お国柄）の変化について記しておきたい。

「反共ナショナリズム」が北朝鮮との異質性を重視するとしたら、「民族ナショナリズム」はむしろその同質性を重視する。前者が「民族」(nation)より「国家」(state)を重視するとしたら、後者は「国家」より「民族」を重視する態度であり、民族と国家は一致すべきであると考ええる。「反共ナショナリズム」が北に対する南の優越性、つまり民主主義や法治主義や思想・信条の自由を重視するとしたら、「民族ナショナリズム」が重視するのは国家の「正統性」であり、日本統治期に抗日武装闘争を展開した北朝鮮には韓国よりも「民族」としての「正統性」があると考ええる思考である。

「反共ナショナリズム」と「民族ナショナリズム」のせめぎあいには韓国の歴史であり、長く優位の立場にあったのは「反共ナショナリズム」の側であったが、やがて韓国が豊かな国になり、国力が増大すると、北朝鮮に対する脅威の感覚は急激に減退し、「反共ナショナリズム」は動員力を失うようになる。今日「反共ナショナリズム」には否定的眺めが多い。しかし「反共ナショナリズム」には、韓国人のナショナリズムにある種のハンデを与えることによって、その原初的感情が燃えさかることを抑制し、新興国として出発した韓国が、合理的で活力ある現代国家として成長することを可能にした功績があることは銘記されてよい。「反共ナショナリズム」には「反日」を抑止する機能があったのであり、それは韓国が原初的紐帯の感情を刺激しない方法でもあった。韓国は、長い間、反日を標榜しつつも活力ある現代国家建設のために日本をうまく利用してきた国であった。韓国はその発展や繁栄に必要なモノやヒトや技術を日本からとり入れることに余念がなかったものであり、また日本人もそれに協力したのではなかったか。